



Title	空間相対名詞について：モンゴル語の「naga-、caga-」と日本語の「手前、向こう」の対照
Author(s)	巴雅爾都楞
Citation	語文. 2022, 116-117, p. 152-166
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/90796">https://doi.org/10.18910/90796</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 空間相対名詞について

——モンゴル語の「naga-、caga-」と日本語の「手前、向こう」の対照——

## 巴雅爾都楞（バヤロドウルン）

### 一 はじめに

日本語の相対名詞には、「前、後ろ、右、左、手前、向こう…」などがあるのと同様に、モンゴル語にも「*emün, e' hoïn, a, baragun, jegün, nagan, a' cagan, a...*」といった表現が存在する。これらの相対名詞は空間の位置や方向を指し示すことから本稿では空間相対名詞と呼ぶことにする。

本稿の目的は、次の二点である。

(一) モンゴル語の「naga-、caga-」と日本語の「手前、向こう」との対照を通じて、両言語の空間相対名詞の共通点・相違点を明らかにすること。

(二) モンゴル語の *naga=si*、*caga=si* の指し示す方向と指示詞の指す方向の比較を行い、その特徴を明白にすること。

本稿では、モンゴル語の *naga-*、*caga-* を語根にもつ一連の語を取り上げることとする。*naga-*、*caga-* は話者から見て基準点の手

前が *naga-* で、基準点の奥が *caga-* である。

従来 of 相対名詞研究には、他の物との相関関係に注目した松下一九三〇や、相対名詞の修飾部に焦点を置いた奥津一九七四や日本語、中国語、英語、韓国語の場所の捉え方に言及した田窪二〇一〇などがある。また、日本語の空間相対名詞の表す位置に注目した研究では高橋二〇〇九がある。しかし、日本語と他言語との対照を通じて言語の空間位置や方向にスポットを当てた研究は調べた限り見当たらなかった。

今回の対照分析を通して、両言語の空間相対名詞には基準点というものが必要であることが共通点であり、その基準点になる個体自体が元々方向性を持つ場合と、持たない場合では、モンゴル語の *naga-*、*caga-* と日本語の「手前、向こう」の対応関係が異なることが明らかになった。

本稿の構成は以下の通りである。二節では日本語とモンゴル語における空間相対名詞に関する先行研究を取り上げる。三節では

naga、caga」につく接辞を分析し、指し示す空間位置や方向を明白にする。四節ではモンゴル語の naga、caga と日本語の「手前、向こう」との比較を行い、その共通点と相違点を明らかにする。五節ではモンゴル語の「naga=si、caga=si」と日本語の「ソッチ、ソッチ、アッチ」の比較を行い、それぞれの方向指示の特徴を指摘する。六節はまとめである。

## 二 先行研究

### 二・一 日本語の先行研究

日本語の相対名詞に関する研究には、松下（一九三〇）、奥津（一九七四）、田窪（二〇一〇）、高橋（二〇〇九）などがある。

松下（一九三〇・二二九）では「相対名詞は他物に対して相関係してのみ具備的に考えられ、単独に考えては意味の具備しない半概念を表わす名詞であると定義しているのに対し、奥津（一九七四・一八五）は、付加名詞の中で「マエ」「アト」の類は叙述文以外の修飾句もとることができるという特殊性を持っており、またその意味が相対的な時点や地点などを表わすので相対名詞と名づけるとしている。

高橋（二〇〇九）は、空間的存在（ⅡX）をとし、修飾要素として相対的な空間関係を表すものを空間相対名詞（ⅡY）とよび、以下のように主な空間相対名詞とその修飾要素の形式を挙げている。

空間相対名詞：「前・後ろ」「上・下」「右・左」「東・西・南・北」「となり」「そば」「なか」……

a. 「名詞+の」による修飾

例：車（ⅡX）の前（ⅡY）に子供が座っている。

b. 節による修飾

例：「車（ⅡX）をとめてある」前（ⅡY）に子供が座っている。  
また、高橋（二〇〇九・一九〇）は「基準点用法／部分用法」を提案している。

a. 車の前にバトカーをとめてある。

b. 車の前にキズがついている。

「車の前」はaでは車に対する前の方向を表すのに対し、bでは車そのものの前部分を表す。それを「車の前」を「XのY」の形式に一般化し、 $\alpha$ と $\beta$ にみられる解釈をそれぞれ「基準点用法／部分用法」とよんで以下のように定義する。

a. 基準点用法ⅡXを基準点と捉え、ⅡYに対する方向Ⅱに言及する。

b. 部分用法ⅡXそのものを構造体と捉え、Ⅱの固有の部分Ⅱに言及する。

本稿の分析においての基準点は上記の例でみれば、「車」に当たる。そのため、基準点用法と部分用法にわけることはしない。すなわち、基準点用法であれ、部分用法であれ、空間位置を示す上で共通点となるのは本稿でいう基準点である。

本稿では、空間相対名詞とはそれ自体では意味が完結せず、基準点によって空間関係を表す一連の名詞類のことを指す。なお、上記の先行研究のほとんどが名詞の修飾節に重点を置いているの

に対し、本稿では空間をどの形式がどう指し示すのかについて述べる。

## 二二 モンゴル語の先行研究

モンゴル語の *naga*、*caga* については主に次の二つの説が広く知られている。それはハス額爾敦等（一九九六）の副詞説と清格爾泰（二〇〇〇）よる時位詞説である。

ハス額爾敦等（一九九六：三四六）は、*naga* と *caga* 語根をもつ一連の語を、場所や方向を表す副詞であると述べている。① *naga=na*（何かのこち側で：場所）、② *caga=na*（向こうあるいはあっち側で：場所）、③ *naga=si*（こちへ：方向）④ *caga=si*（そちへ、あるいはあっちへ：方向）のほか *naga=gur* と *caga=gur*（この辺とあの辺：場所）などの語をあげている。

本稿ではハス額爾敦等（一九九六）を代表とした副詞説より時位説を支持し、時位詞（時間・場所詞）説を中心に取り挙げる。

清格爾泰（二〇〇〇：二〇四）は、時間や場所を表わし、かつ実詞（内容語）の質と虚詞（機能語）の性質を兼ね揃えた一類の語を時位詞<sup>(3)</sup>とす。 *naga*、*caga* は時位詞特有の語形変化を有する。 *naga*、*caga* に付く接辞とその意味を以下のようにまとめている。

### ① 実名詞性時位詞

- A. *naga=na*、*caga=na* : *na* は時間と場所を表わす接辞である。
  - B. *naga=tai*、*caga=tai* : *tai* は存在位置を表わす接辞である。
- ② 形容詞性時位詞

- A. *naga=du*、*caga=du* : *du* は部分的位置を表わす接辞である。
- B. *naga=hi* (*dehi*)、*caga=hi* (*dehi*) : *hi* (*dehi*) は所属位置を表わす接辞である。

### ③ 副詞性時位詞

- A. *naga=gur*、*caga=gur* : *gur* は近所位置を表わす接辞である。
- B. *naga=si*、*caga=si* : *si* は方向を表わす接辞である。

## 三 モンゴル語の *naga*、*caga* の分析

本節では、実例をあげて接辞の意味分析を行う。研究枠組みとしては先行研究に倣い、以下のように実名詞性、形容詞性、副詞性の三つにわけ、*naga*、*caga* 空間相対名詞を分析する。モンゴル語は膠着語であり、語根にいろいろな接辞を付けることで新しい語が作れる。また、接続する接辞の空間位置と表す方向性に焦点をおいて検討する。

### ① 実名詞性<sup>(5)</sup>

- A. *naga=na*、*caga=na*

(一) *naga=n\_a*  
*ci-nu naga=n\_a bai=g\_a nom-i-abu=gd og.*

2-GEN *naa*-存在 あれ-IMPF 本-ACC どれ-CVB へれ。

あなたの手前にある本をどれへくれ。

(二) *caga=n\_a*

*caga=n\_a bai=g\_a masin ta-nu uu.*

*caa*-存在 どれ-IMPF 車 どれ-敬称-GEN Q

向こうにある車はあなたのですか。

例(1)では本のある場所を *naga=n\_a* び、(2)は車のある場所を *caga=n\_a* び指している。よって、*n\_a*は存在位置を表わす接辞である。

B. *naga=tai* ' *caga=tai*

(c) *naga=tai* *üher-ni* *caga=tai* *üher-ece-ben* *targu=n.* (c)

*naa*-所有 牛-TOP *caa*-所有 牛-ABL-REFL 太さ

手前にいる牛の方が向こうにいる牛より肥えている。

この句では牛が立っている位置を指していることから、*tai*は所有位置を表わす接辞であることがわかる。

② 形容詞性

A. *naga=du* ' *caga=du*

(4) *masin-u* *naga=du* *tal\_a-in* *egide-ni* *emdere=jai*

車-GEN *naa*-部分側-GEN *ña*-TOP 壊れる-PAST

車の手前のドアが壊れた。

接辞 *du* は車のドアという部分的位置を表わす接辞である。

B. *naga=duhi* (hi) ' *caga=duhi* (hi)

(5) *naga=duhi* (*caga=duhi*) *comu-ban* *abu=gad* *ög.*

*naa*-所属 (*caa*-所属) コップ-REFL *naa*-CVB くれ

手前の(向こうの)コップをとってくれ。

この句では *duhi* (hi) は日本語の属格の「の」のような働きをし、*ög.* よって、所属位置を表わす接辞である。

③ 副詞性

A. *naga=gur* ' *caga=gur*

(6) *agula-in* *naga=gur* *gool* *urus=q* *u* *bai=n\_a*

山-GEN *naa*-移動 川 流れる-CVB *naa*-PRES

山の手前を川が流れている。

接辞 *gur* の後ろにくるのは、殆ど動作動詞であり、*gur* は動作位置を表わす接辞であることがわかる。

B. *naga=si* ' *caga=si*

(7) *hurdu* *naga=si* *-ban* *ire.*

早 *naa*-方向-REFL *naa*

早 *naa*-方向-REFL *naa*

(8) *caga=si* *yabu=ju* *bai=g\_a* *hümin* *hen* *boi?*

*caa*-方向 歩く-CVB *naa*-IMPF 人 だれ Q

あっち(向こう)へ歩いて行く人はだれ?

例(7)と例(8)からは、*na*は方向を表わす接辞であることは明らかである。この方向を指す *si* については五節で検討する。

上述のような実例をあげて分析した結果、清格爾泰(二〇〇〇)の主張と少し異なる解釈ができるようである。まずは、実名詞性時位詞の「*na*は時間と場所を表わす接辞である」としたところを、存在位置を表す接辞であると改め、「*tai*は存在位置を表わす接辞である」としたところを、所有位置を表す接辞であると判断した。

表一 naga-cagaとその接辞の指示範囲

空間相対 名詞類型	指示範疇	語根		
		接辞	naga-	caga-
実名詞性	存在位置	n_a (n_e)	naga=n_a (n_e)	caga=n_a (n_e)
	所有位置	tai (tei)	naga=tai (tei)	caga=tai (tei)
形容詞性	部分的位置	tu (du)	naga=tu (du)	caga=tu (du)
	所属位置	duhi	naga=duhi	caga=duhi
副詞性	移動位置	gur	naga=gur	caga=gur
	方向	si	naga=si	caga=si

次に、副詞性時位詞のところの「gur」という接辞に対しては解釈が異なると思われる。「gur」は近所位置を表わす接辞である」としていたが、本稿では「gur」を近所位置というよりは、動作位置を表わす接辞だと考える。それらを纏めると、表一のようにな

る。

以上の分析からは、モンゴル語の空間相対名詞に付く接辞は決められていて、空間位置を詳細に示す機能を果していることがわかる。このように空間位置を詳細に分けて表現するのはモンゴル語の特徴であると言えよう。また、n\_a(n\_e)・tai(tei)・tu(du)・duhi・gurなどは位置を指しているのに対し、接辞siは方向を指し示している。これはモンゴル語の空間相対名詞全体に言える特徴である。つまり、モンゴル語の空間相対名詞は空間に基準点を見つけ、さらにその基準点の周りを位置と方向によって特定している。

空間はそれ自体としてひとつの自然環境ではあるが、空間を分割して認識されるその環境は、もはや自然的環境ではなく文化的環境である(吉田一九七八:二〇五)。そうした文化的環境(空間)の認知の仕方は個々の言語によって異なる。モンゴル語のnaga-cagaと非常に似た振る舞いをする語彙が日本語に存在する。それは「手前」と「向こう」である。『現代日本語モンゴル語辞典』では「手前、向こう」が「nagadu・cagadu」で訳されている。すなわち、モンゴル語の「naga-caga」に日本語の「手前、向こう」が対応しているとの記述である。従って、4節では、「naga-caga」と「手前、向こう」の比較を行い、その相違点と共通点を明らかにする。

四 「naga- caga-」と「手前、向こう」との比較

日本語の「手前、向こう」とモンゴル語の「naga- caga-」の比較に入る前に「基準点」というものに触れておく必要があるように思われる。ここでいう基準点とは相対名詞を用いるとき位置や方位の把握のために設定しておかなければならない点のことである。相対名詞はその定義からもわかるように、例えば「手前」といったとき、何の手前と言わなければ意味が完結せず、「なに」というところに具体的なものが入ってきてこそ意味が読み取れるようになる。この点で他の相対名詞も同様である。モンゴル語の「naga- caga-」も基準点というものが定まらない限り出現できないという日本語の相対名詞と同じ性質をもつ。

これを踏まえて本論に入ることにする。「naga- caga-」と「手前、向こう」との比較を三つの場面に分けて分析を行う。四・一節では基準点が事物である場合、四・二節では基準点となり得る指示対象が複数あり、基準点が流動的な場合、四・三節では会話場面では基準点が聞き手である場合を取り上げる。結論を少し先取りすると、四・一節と四・二節においてはモンゴル語の「naga- caga-」と日本語の「手前、向こう」に対応関係が見られる。最も興味深いのは、対応関係が見られなくなる四・三節である。その原因は基準点となる個体自体が持つ方向性にあることを指摘する。

四・一 基準点が事物である場合

(9) *gool-un naga-gur mori=tai хүмүүн ябу=ju bai=n\_a.*

川-GEN naa-移動 馬-POS 人 行<-CVB 川  
-PREBS

川の手前を馬に乗った人が通っている。

(10) *ene agula-in caga-du tal\_a-du hoyar monggol ger bai=n\_*

a.  
川の山-GEN caa-部分側-D/L 二つモンゴルゲルある  
-PREBS

川の山の向こうに二軒のモンゴルゲルがある。

例(9)はモンゴル語では川のことから側を「nagagur」といってその日本語訳をみると、「手前」である。また例(10)においてもモンゴル語の「cagagur」に対し、日本語の「向こう」が使われる。つまりモンゴル語の「naga- caga-」が日本語の「手前、向こう」に対応している。

四・二 基準点が流動的である場合

(11) = (9) (牛が縦に並んでいる)

*naga-tai üher-ni caga-tai üher-ee-ben targu-n.*

naa-所有 牛-TOP caa-所有 牛-ABL-REFL 太さ-  
手前にいる牛の方がむこう(奥)にいる牛より肥えている。

(12) (椅子が縦にたくさん並べてある)

*hamug-un naga-du tal\_a-aca-ni sagu=gurai.*

一番-GEN naa-部分 側-ABL-TOP 座る-OPT  
手前から座ってくだな。

例 (11) のような指示対象が二つ並んでいるときは、「手前の牛」の「手前の」の部分は「向こうの牛」を基準点と捉えており、反対に「向こうの牛」の「向こうの」の部分は、「手前の牛」を基準点として捉えていると考えられる。その場合、モンゴル語では「naga-、caga-」が使われる。日本語でも「手前、向こう」の使用は可能である。また例 (12) も基準点をはっきりさせるためモンゴル語では「一番」という語を使っているが日本語では「手前」だけでもその意味が十分に読み取れる。ここでもモンゴル語と日本語で「naga-、caga-」と「手前、向こう」の対応関係が見られる。

四. 三 会話場面で基準点が聞き手である場合

ここで「話し手と聞き手が向かい合っている場合」と「話し手と聞き手が同じ方向を向いている場合」の二つの場面を設定してモンゴル語と日本語の対照を行う。

- (13) あなたの手前にある本を取ってくれる？
  - (14) あなたの向こう(後ろ)にある本を取ってくれる？
  - (15) \*あなたの手前にある本を取ってくれる？
  - (16) \*あなたの向こうにある本を取ってくれる？
- 話し手と聞き手が向かい合っている場面の例 (13) と (14) は日本語の自然な文であるが、例 (15) と (16) のような話し手と

聞き手が同じ方向を向いているときは非文になる。例 (15) と例 (16) の自然な文はそれぞれ「あなたの後ろにある本を取ってくれる？」と「あなたの目の前にある本を取ってくれる？」である。同じ場面設定でモンゴル語の例文をみても。

- (13) ci-nu naga-na bai=g\_a nom-ti abu=gad öggü=n\_e üü?
    - 2-GEN naa-存在 ある-IMPf 本-ACC なる-CVB くれる-PRES Q
 あなたの手前にある本とってくれる。
  - (14) ci-nu caga-na bai=g\_a nom-ti abu=gad öggü=n\_e üü?
    - 2-GEN caa-存在 ある-IMPf 本-ACC なる-CVB くれる-PRES Q
 あなたの向こうにある本とってくれる。
  - (15) ci-nu naga-na bai=g\_a nom-ti abu=gad öggü=n\_e üü?
    - 2-GEN naa-存在 ある-IMPf 本-ACC なる-CVB くれる-PRES Q
 あなたの手前にある本とってくれる。
  - (16) ci-nu caga-na bai=g\_a nom-ti abu=gad öggü=n\_e üü?
    - 2-GEN caa-存在 ある-IMPf 本-ACC なる-CVB くれる-PRES Q
 あなたの向こうにある本とってくれる。
- モンゴル語では上の四例とも自然な文であり、例 (13) と (15) は同じ表現になり、naga- が使われる。例 (14) と (16) も同様な表現であり、caga- が使用される。

聞き手が基準点になった場合、そもそも「手前」というのは、聞き手の目の前で、かつ聞き手に近い場所を指し、「向こう」というのは聞き手を隔てて反対側を指す。「naga」は話し手からみて聞き手の話し手側を指し、「caga」は話し手からみて聞き手の向こう側を指し、「naga、caga」も聞き手に近い。

「naga、caga」と「手前、向こう」の比較を通して、まず、日本語の「手前、向こう」はモンゴル語の「naga、caga」に *n*、*a* (*n*、*e*)、*tai* (*tei*)、*tu* (*du*)、*duhi*、*gur* などを付けて、詳細な位置を表すものと、「naga、caga」に *si* をつけて、方向を示すものとも対応することがわかった。これは「手前、向こう」は位置と方向を両方表すことができるということである。次に、会話場面において話し手と聞き手が向かい合っているとき、「naga、caga」と「手前、向こう」は対応するが、聞き手と話し手が同じ方向を向いているときは、対応関係が成り立たない。この対応関係が成り立たない理由は、人間という個体もつ「まえ」という方向性が影響しているように思われる。聞き手の代わりにポールを置いてみると四、一節のように「naga、caga」と「手前、向こう」の対応関係が成り立つことになる。

このまでの分析においては、「naga=si、caga=si」の示す方向についてまだ詳細な分析を行っていない。五節では、「naga=si、caga=si」の特徴をより明確にするため、方向を指し示す指示詞「コッチ、ソッチ、アッチ」の比較を行うことにする。

## 五 モンゴル語の「naga=si、caga=si」と日本語の「コッチ、ソッチ、アッチ」の比較

本節では方向を表すモンゴル語の「naga=si、caga=si」の特徴をはっきりさせるために、日本語の「コッチ、ソッチ、アッチ」とモンゴル語の方向を表す指示詞「e=si、te=si」との比較を行う。

(17) *hurduṅ naga=si-ban ire.*

早く naga-方向-REFL 来た

早く(向こう)へ歩いていく人はだれ?

(18) *caga=si yabu=jū bai=g\_a хүмүүн хөн бой?*

caga-方向 歩く-CVB いる-IMPF 人 だれ

あっち(向こう)へ歩いていく人はだれ?

例(17)、例(18)からもわかるように、「naga=si、caga=si」をそれぞれ「手前」と「向こう」だと翻訳することも可能であるが、日本語の指示詞のコッチとアッチを使うと自然な日本語になるように思われる。従って日本語の「コッチ、ソッチ、アッチ」とモンゴル語の「naga=si、caga=si」の比較を行い、それぞれの特徴を見ていくことにする。

## 五 一 先行研究

日本語の指示詞についての先行研究は数多くあるが、方向指示詞である「コッチ、ソッチ、アッチ」についての記述はそれほど多くない。金水(一九九一)は数少ない研究の一つであり、その

記述は参考になるものが多い。以下、金水（一九九二）をみていく。



図一（金水一九九一：五）融合型



図二（金水一九九一：五）対立型

金水（一九九一・五）では、コチラ類の示す方向は視点を中心にして接近遠離型、境界型、指定型に分類できるとしている。

A. 接近遠離型・遠方から話し手に向かう方向を「こちら／こっち」で指示する。「こちら／こっち」の反対方向は以下の図一のような融合型と図二のような対立型によって異なる（Sは話し手、Hは聞き手）。

B. 境界型・接近遠離型の下位分類とし、視点から離れたところに境界（たとえば塀・壁などの建築物、川や海などの地理的障

碍、心理的縄張り等）が認識される場合に適用されるもので、方向と言うよりも「側」という概念で空間を区分する。

C. 指定型・視点が自分を起点とし、指差などで方向を指定するものである。話し手が指定する方向は「こちら／こっち」であり、聞き手が指定する方向があれば、それは「そちら／そっち」となる。このパターンでは基本的に「あちら・あっち」は現れないとしている。

(19) (二人が分かれ道で口論している)  
そっちの道じゃないよ。こっちだよ。

五・二 モンゴル語の「[aga=si, caga=si]」と日本語の「コッチ、ソッチ、アッチ」の比較

金水（一九九二）を参考にし、モンゴル語の「[aga=si, caga=si]」と日本語の「コッチ、ソッチ、アッチ」の対照を接近遠離型、境界型、指定型に分けて分析を行う。

また、日本語の指示詞はコ・ソ・アの三系列に対し、モンゴル語は近称の $\alpha$ 系と遠称の $\beta$ 系の二系列である。ここで、日本語とモンゴル語の方向を示す指示詞を取り上げているのは、モンゴル語の「[aga=si, caga=si]」が指し示す方向の特徴をもっと明白にするためである。また、例(20)～(26)、(32)は金水（一九九二）の引用である。

## 五・二・一 接近遠離型

(20) ボールを「こ」ちに投げてくたさう。

(20) bõmbüge-i naga=si-ben side=gerci

ボール-ACC naa-方向-REFL 投げる-OPT

ボールを「こ」ちに投げなう。

(21) 先生が「こ」ちをみてゐるぞう。

(21) bāgsi naga=si hara=ju bai=n. a sio.

先生 naa-方向 みる-CVB みる-PRES MP

先生が「こ」ちをみてゐるぞう。

(22) しばらくあっちを向いてくたさう。

(22) Baga la caga=si-ben hara=ju bai=garrai.

少く強調 caa-方向+REFL みる-CVB みる-OPT

少しかけあっちを向いてくたさう。

日本語の例文(20)の(21)の(22)とモンゴル語の訳文(20)の(21)の(22)は完全に対応している。すなわち視点が話し手にある場合、

あるいは聞き手の視点が考慮されなくてもよい場合である。つまり

融合型の場合である。以下は対立型をみてみよう。

(23) (話し手から聞き手へ) ボールをそ「ち」になげます。

(23) bõmbüge-yi caga=si haya=la

ボール-ACC caa-方向 投げる-PRES

ボールをあ「ち」に投げます。

例(23)のように話し手が聞き手に向かってボールを投げると

いう場面では、モンゴル語の訳文(23)はそのまま対応しない。例

(23)のイメージとしては図二の「あっち」と同じく話し手から離

れていく方向である。例(23)に意味的に対応する文にすると

(23) のようになる。

(23) bõmbüge-yi ci-nu te-si haya=la

ボール-ACC2-GEN 遠称-方向投げる-PRES

ボールをああなたの方へ投げます。

モンゴル語には聞き手領域を専門に指す指示詞体系が存在しないため、この場合は二人称代名詞と遠称の方向指示詞の te=si が

使われている。

(24) 気を付けていないと、ボールがそ「ち」に飛んでくるかも知

れなうぞう。

(24) hecive=hü ügei bol bõmbüge ci-nu te=si uci=hu

気をくける-VN NEG TOP ボール 2-GEN 遠称-方向い

く-VN

magad ügei siü.

かもしれない MP

気をつけないと、ボールがあなたの方に行くかもしれないぞう。

例(24)も(23)と同じく caga=si が使えない。しかし、te=si が

両方使える。それでは「naga-si' caga-si」に「e-si' te-si」の違い

は「ち」にあるかどうか疑問がぶつくる。

(25) naga=si-ben ire'

「こ」ち-方向+REFL くる

「こ」ちへ来る。

(26) e=si-ben ire'

「あ」ちへ来る。

近称-方向-REFL ンン

こつちへ来い。

例 (25) と例 (26) を見た限りではその区別がはっきり見えな  
い。それでは特定の方向に向かった時はどうだろう。

(27) agula te=si yabu=hu:

山 遠称-方向 ンン-VN

山の方へ行く。

(28) \* agula caga=si yabu=hu:

山 caa-方向 ンン-VN

モンゴル語において例 (28) は非文である。例 (27) は正常文  
であり、ほかにも特定の方向を指す場合、日本語の「に、へ」な  
どの方向を示す格助詞と同じ働きをしているように思われる。例  
(28) は山を基準点とし、agula aca (から) caga-si yabohu  
とすると正常文になるが、「山より向こうの方向に行く」という意  
味になる。特定の方向を指す場合において基準点が定まらなけれ  
ば、naga=si-<sup>2</sup> caga=si を使うことができない。

### 五二二 境界型

(29) 山(のこつち)とあつちでは景色が異なる。

(29) agulan-un naga=na bolun caga=na öngge üjemji

山-GEN naa-位置 ヌ caa-位置 色 景

onduu

違う

山(のこつち)側とあつち側では景色が異なる。

金水(一九九一:六)での指摘通り、例(29)では「こつち、  
あつち」は、方向というより「側」という概念で空間を区分して  
いる。それは例(29)のモンゴル語の訳文をみればもつとはっき  
りする。日本語の「こつち、あつち」は方向を示すほか、「側」と  
も言えるような感覚で空間を指し示すこともできる。しかし、モ  
ンゴル語ではこの場合は方向を示す「naga-si caga-si」と「e-si  
te-si」を使うと非文になる。

(30) tere agulan-aca naga=si 500m' caga=si 1000m

あつ 山-ABL naa-方向 500m caa-方向

1000m

bol mi-nu gjaar

TOP 1-GEN 土地

あの山よりこつち五百メートルとあつち千メートルは私  
の土地です。

例(30)のように山などが基準点になる場合はそこからの方向  
を指すときに「e-si te-si」を使うことができるが、「naga-si  
caga-si」のほうがより自然である。

(31) (中継で) そつちの様子を伝えてください。

(31) te-nde-hi baidal-eyen tamjigulu=garai

遠称-場所-名詞化辞 様子-REFL 伝える-OPT

そつちの様子を伝えてください。

日本語の例(31)のモンゴル語訳が(31)であるが、モンゴル

語ではやはり方向を「上」を使うことができない。

まとめると、一連の例文からみてわかるのは、境界型の場合日本語の「こっち、そっち、あっち」とモンゴル語の「naga=si, caga=si」<sup>1</sup>「e=si, te=si」は対応しないことである。モンゴル語の「naga=si, caga=si」<sup>2</sup>「e=si, te=si」は純粹に方向を指し示す語であり、「側」のような空間を指すことができない。

### 五 二 三 指定型

(32) (二人が分かれ道で口論している)

そっちの道じゃないよ、こっちだよ。

(32) \*caga=si-in jam bisi naga=si.

caa-方向-GEN 道 NEG naa-方向

(32) te=si bisi e=si sió.

遠称-方向 NEG 近称-方向 MP

そっちじゃない、こっちだよ。

(33) te=re jam bisi, e=ne jam sió.

遠称-場所 道 NEG 近称-場所 道 MP

その道じゃない、この道だよ。

日本語の例文(32)をモンゴル語にすると、例(32)と(33)のようになる。例(32)は非文である。モンゴル語の「naga=si, caga=si」<sup>1</sup>「e=si, te=si」はほかの語を修飾することも修飾されることもできない。そのため、(32)のように「道」とった場合は文が成立する。例(32)において「naga=si, caga=si」が使わ

れないのは例(27)と同じく特定の方向を指す時は使用できない。また(33)のように表現することもできる。

(34) (目の前にシーソーがある)

私(こっち)に乗るから、あなたがそっちに乗って。

(34) bi naga=du tal\_a-du sahu=ya, ci caga=du tal\_a-du

sagu.

1 naa-部分 側-D/L 座る-意志 2 caa-部分 側-D/L

座れ。

私はこっち側に座るから、あなたはそっち側に座って。

例(34)と例(34)をみても、日本語では方向を表わす「こっち、そっち」が使われているのに対し、モンゴル語では場所を表わす「naga=du, caga=du」が使われている。すなわち、日本語の「こっち、そっち、あっち」は場所と方向両方を表わすことができるが、モンゴル語の「naga=si, caga=si」<sup>1</sup>と「e=si, te=si」<sup>2</sup>は方向だけを指し示すということである。

### 五 三 まとめ

今回の分析を通して日本語の「コッチ、ソッチ、アッチ」とモンゴル語の「naga=si, caga=si」は接近遠離型の融合型の場合は完全一致するが、対立型の場合はモンゴル語には聞き手領域を専門に指し示す指示詞体系が存在しないため、第二人称を用いてそれを表現することになると言える。また、境界型においては日本語の「コッチ、ソッチ、アッチ」とモンゴル語の「naga=si,

「caga=si」は対応関係にはないことがわかった。指定型においても純粹に方向を指す場合に限り日本語とモンゴル語の対応関係がみられた。以上の三つの型を分析の分析を通して、日本語の「コッチ、ソッチ、アッチ」とモンゴル語の「naga=si、caga=si」は純粹に方向を指すときだけ対応関係を成すことがわかった。つまりモンゴル語の「naga=si、caga=si」は方向だけを指し示す語である。

## 六 全体のまとめと課題

本稿で明らかになったことは、次の3点である。

(1) これまで意味的に対応しているように見られてきたモンゴル語の「naga、caga」と日本語の「手前、向こう」が、実際は単純に対応しているわけではないこと。

(2) 両言語の空間相対名詞には基準点というものが必要であることが共通点であり、その基準点になる個体自体が元々方向性を持つ場合と、持たない場合では、モンゴル語の naga、caga と日本語の「手前、向こう」の対応関係が異なること。

(3) 日本語の「コッチ、ソッチ、アッチ」とモンゴル語の「naga=si、caga=si」は純粹に方向を指すときだけ対応関係を成すことがわかった。また、モンゴル語の「naga=si、caga=si」と「e=si、te=si」の違いは特定の方向を示せるかどうかにあること。今後の課題は、次の2点である。

(1) モンゴル語の「naga=si、caga=si」はどのようなときに日

本語の「手前、向こう」と対応し、どのようなときに指示詞の「コッチ、ソッチ、アッチ」と対応するかをもっと明白にさせること。

(2) 「手前」の用法に、話し手が聞き手の視点を参照することがある。それをどう解釈するか。たとえば、話し手と聞き手が向かいあっていて、二人の間に一本の木があり、木の近くにA、Bの位置にボールが置いてあるとする。話し手が「木の手前のボールを取ってください」といった場合、聞き手は<sup>2</sup>話し手の手前にあるAを取るか、<sup>3</sup>聞き手の手前であるBを取るか。

S: 木の手前のボールを取ってください。

H: AとBのどれを取るか。

モンゴル文字のローマ字転写:

\*[d]=a、\*、\*、\*[a]=e、\*[i]=i、\*[o]=o、\*[u]=u、\*[ɔ]=ɔ、\*[ɛ]=ɛ、\*[ɜ]=ɜ、\*[e]=e、\*[ɛ]=ɛ、\*[o]=b、\*[p]=p、\*、\*[x]=h、\*[g]=g、\*[m]=m、\*[l]=l、\*[s]=s、\*[j]=ʃ、\*、\*[t]=t、\*[d]=d、\*[ʃ]=ʃ、\*[θ]=θ、\*[j]=j、\*[v]=v、\*[r]=r、\*[w]=w、\*[o]=ne、\*[k]=k、\*[f]=f、\*[ʒ]=h、\*[ʒ]=zh、\*[tʃ]=ch、\*[s]=sh、\*[z]=z、\*[b]=b、\*[d]=d

グロスの省略記号の対応は、次の通りである。

ABL: 奪格、ACC: 対格、CMT: 共同格、CVB: 副動詞語尾、D/L: 与位格、GEN: 属格、MPE: 未定、INST: 造格、MP: ムードの小辞、CO: 隠れたCO、NEG: 否定、OPT: 希求、PAST: 過去、PN: 人名、POS: 所有語、PRES: 現在未来、H: 疑問

助詞、REFL: 再帰所有、TOP: トピック、VN: 形動詞語尾  
 1PROC: 1人称所有辞、2PROC: 2人称所有辞、3PROC: 3人称所有辞、1.. 1人称、2.. 2人称、3.. 3人称。語  
 末分かつ書き母音・助詞境界、= 接辞境界、nag-: naga-、  
 caat: caga。

【参考文献】

- 奥津敬一郎 (一九七四) 『生成日本文法論』 大修館書店  
 小沢重男訳 (二〇〇〇) 『現代モンゴル語辞典』 改訂増補版 大学書林  
 金水敏 (一九九〇) 「方向と選択—コチラ類の指示詞—」 『日本語学』 第  
 九卷第三号 明治書院 一一一—一二〇頁  
 金水敏 (一九九一) 「方向と選択—コチラ類の指示詞—」 「方向と選択」  
 補筆—場所と方向— 未公開 一九九一年三月 『高度な日本語記  
 述文法書作成のための基礎的研究』 一一—一五頁  
 高橋奈津美 (二〇〇九) 「現代日本語における空間相対名詞の修飾節に  
 ついての試論」 『京都大学言語学研究所』 京都大学大学院文学研究科  
 言語学研究室 一八—一八五—二〇四頁  
 田窪行則 (二〇一〇) 『日本語の構造 推論と知識管理』 くろしお出版  
 清格爾泰 (一九九二) 『蒙古語語法』 (汉语) 内蒙古人民出版社  
 — (二〇〇〇) 『現代蒙古語語法』 修訂版 内蒙古人民出版社  
 哈斯額爾敦等 (一九九六) 『現代蒙古語』 内蒙古教育出版社  
 哈斯巴干 (一九九六) 『中世紀蒙古語研究』 内蒙古教育出版社  
 フフバートル (一九九七) 『モンゴル語基礎文法』 株式会社インタ―  
 ブックス  
 松下大三郎 (一九三〇) 『改撰標準日本文法』 (引用は東京・勉誠社 一  
 九七四再版より)

注

- (1) 松下 (一九三〇) の引用部は、旧字体から新字体に改めた。
- (2) 被修飾名詞は連体修飾文中には現われず、いわばその外から新たに付加されるので、これを付加連体名詞 (または簡単に付加名詞) と呼ぶ。松下 (一九三〇: 一八二)
- (3) 清格爾泰氏は実時位詞と時位詞を区別している。年、月、日、明  
 日、春、町、田舎などを実時位詞としている。
- (4) 接辞をつけることによって起きた語形変化である。接辞には、*ɣ*  
*na.e*、*taɪ*、*da*、*ɳai*、*du*、*ɳi*、*ɳu*、*ɳuɳi*、*ɳuɳi*、*ɳuɳi*、*ɳuɳi* などがある。
- (5) 実名詞性という分類に対し、完全には賛成できないが、分類の便  
 を考え、その用語を使うことにする。
- (6) *taɳu* (名詞: 太) + *n* → *taɳu=n* (太い)。*ɳuɳi* の *ɳu* は、名  
 詞の語幹に付き、その名詞を形容詞にする働きをもつ接尾辞である。
- (7) この表は清格爾泰 (二〇〇〇: 二〇六) の表を参考にした。清格  
 爾泰 (二〇〇〇) の表には古語と現代語が入り混じっていることが  
 本表と大きく異なる。
- (8) 参考文献を参照されたい。この字典はキリル文字で書かれている  
 が、本稿の文字転写と一致させるため、以下では伝統文字の綴りに  
 なおした。p. 手前: *ene* *tala* *nagadu* *tala*。向、*ɳuɳi*: *cagadu*。
- (9) モンゴル人が住み、引越しなどに便利な折り畳み式のテントで  
 ある。
- (10) *Bombige-i* *cina* *urugu* *hayala*。  
*ボールACC* 2 下り 投げます  
 という表現もあるが、今回は方向を示す *ɳuɳi* に焦点をおくため、こ  
 ういった表現に言及しない。しかし、方向を指す *urugu* (坂を下る  
 方向)、*ɳagade* (坂を上る方向) の使用もとても興味深い。今後の課  
 題にしたい。
- (11) モンゴル語の指示詞では日本語の「これ、それ、あれ」と「この、

その、「あの」に当たるものを「e-ne、te-re」と表示し、同じ形をとる。

内蒙古科技大学创新基金项目, 项目编号: 2016QDW-1-B12の援助を受けている。

(ばやろどろるん 内蒙古科技大学 外国語学院)